



兵庫浜本陣跡



兵庫浜本陣跡

14 薩摩藩浜本陣（小豆屋）跡

兵庫区出在家町

▶ 13で紹介したとおり浜本陣には9軒の宿がありましたが、そのうちの小豆屋（畠山）助右衛門には薩摩藩が宿として利用していました。

小豆屋の門が平成4年まで現存していましたが、残念ながら解体されてしまいました。

慶応4年1月12日（西暦1868年2月5日）、イギリス書記官アーネスト・サトウが小豆屋を訪れ、吉井幸輔、寺島陶蔵に会い、鳥羽伏見の戦い以降の経過について情報収集しています。



薩摩藩浜本陣 小豆屋の門(古写真)



アーネスト・サトウ



薩摩藩浜本陣 小豆屋跡

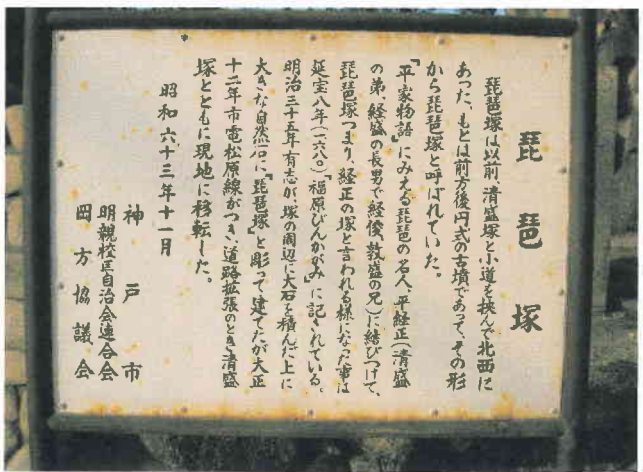
15 浜本陣(絵屋)ゆかりの礎石(魚御堂) 兵庫区中之島2(阿弥陀寺)

▶ 長州藩・福岡藩・宇和島藩などが利用していた浜本陣 絵屋(鷹見)右近右衛門の邸内にあった魚御堂(うおみどう)の礎石が、阿弥陀寺に寄贈されました。この礎石は、福岡藩黒田家から絵屋(鷹見)右近右衛門に譲られたもので、数々の伝説があります。平 清盛が魚の供養のため設けたという説や平 重盛の仮屋敷跡という説。また、通称「楠公供養石(なんこうくようせき)」ともいわれ、湊川合戦の際、足利尊氏軍が戦いに敗れた楠木正成の首をこの石に置いて首実検をしたともいわれています。



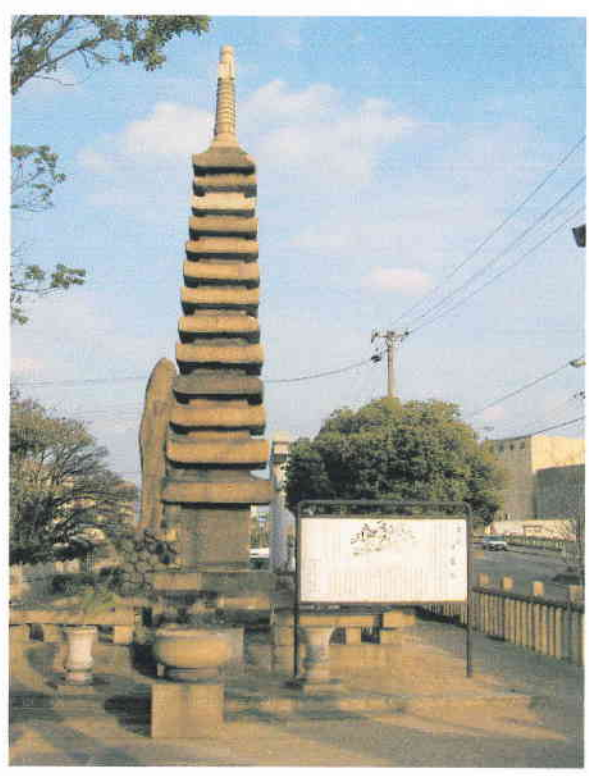
16 源平ゆかりの地 琵琶塚 兵庫区切戸町1

▶ 平 清盛の甥にあたる琵琶の名人 平 経正の塚とも言われています。



17 源平ゆかりの地 清盛塚 兵庫区切戸町1

▶ 清盛塚は、清盛の遺骨を持ち帰った円実法眼(えんじつほうげん)が埋葬した清盛の墓と信じられていた十三重の塔でしたが、「福原のびんかがみ」によると弘安9年(1286)北条貞時が建立した供養塔であることが判明しています。元禄5年(1692)の「兵庫寺社改帳」には清盛石塔の明細と、敷地十三間半に36間半と記されており江戸時代では清盛の墓と人々に伝承されていたようです。大正11年頃、市電松原線の道路拡張工事でもとの清盛塚の地は、移転問題が起こり論議が紛糾したものの結局北東へ11m(現在地)移転と定まり、翌年9月供養して10月に塔は解体されました。地下を調べた結果、墳墓でないことが確認され、塔の台石には弘安9年(1286)2月の刻銘がありました。鎌倉期の十三重の優秀な石塔で高さ8m50cm、初層方145cm、高さ36cm、最上層方88cm、高さ42cmと実測されています。土地では清盛公を兵庫の大恩人と敬い、大正になってから清盛講というのができて、毎年盛大な供養をしていました。



平 清 盛 像

兵庫区切戸町1

▶ 昭和47年5月に建てられた平 清盛像です。

仁安3年(1168)病により太政大臣を辞した平 清盛は、能福寺(神戸市兵庫区)で出家し、福原にある清盛の別荘雪見御所(現湊山小学校周辺)において、政治の実権と権力を行使する一方で、経ヶ島を築造し、宋との貿易によって莫大な利益を蓄えていきます。その間にも京の都では、鹿ヶ谷の陰謀事件や以仁王の平家追討令旨など、政情が不安になっていきました。これら一連の政情不安が因となって清盛は、福原に遷都しますが、源氏の動きに急変があり、わずか6ヶ月で京へ還都することになりました。そして、治承5年(1181)清盛は熱病によって亡くなり、兵庫の隆盛は閉じられることになりました。



19 一遍上人廟所(真光寺)

兵庫区松原通1-1-62

▶ 仏教宗派のひとつである時宗の開祖である一遍上人は、正応2年(1289)8月、この地の観音堂において51歳で生涯を閉じました。のちに弟子の他阿(たあ)上人がこの地に寺を建立し、寺号勅願を伏見天皇からもらい真光寺と称しました。一遍の時宗は浄土真宗の流れをくみ、すべての人が念仏を唱えることで救われると説き、全国を遊行しながら「踊念仏」を広めました。



一遍上人像



20 和田の笠松歌碑

兵庫区松原通1-1(須佐野公園)

▶ 鎌倉初期に藤原為家が「和田の笠松」について詠った歌碑があります。和田の笠松とは、須佐の入江の浜にあった松で、入港する船の目標・目印となっていました。元禄4年(1691)の絵図には、真光寺のそばに松の絵が書かれています。この松は、明治期に住吉神社の境内に移され、昭和になって戦災で焼失しています。

秋風に吹きくる峰の村雨に さして宿かる和田の笠松



21 兵庫城跡

兵庫区切戸町5(キャナルプロムナード)

- ▶ 天正8年(1580)池田信輝と輝政父子が花隈城を攻め落とした功により兵庫の土地を与えられました。それ以降兵庫は、室町幕府の支配を離れ、東大寺や興福寺との関係も脱して、新たに織田信長の支配下となり、これを機に池田氏は花隈城の資材も加えて兵庫城を築きました。その拠点は現在の切戸町、中之島中央市場にかけて東西、南北とも約140mの規模で、周囲には幅3.6mの堀がありました。古来兵庫は、源平の合戦、湊川合戦以来たびたび大きな合戦があり、その都度ひどい戦災を受けました。兵庫城跡は江戸時代に入って元和3年(1617)尼崎藩領となり、藩の陣屋となり、明和6年(1769)幕府領となってからは大坂町奉行所に属し、与力や同心の勤番所として明治になるまで続きました。



22 兵庫県庁跡

兵庫区切戸町5(キャナルプロムナード)

- ▶ 明治新政府は慶応4年(1868)1月22日、この城跡の一部に兵庫鎮台を設けました。2月2日に兵庫裁判所と名が変わり、5月23日にまた「兵庫県」と改められたため兵庫県庁となりました。その後県庁は同年9月18日、現在の神戸地方裁判所の場所に新築移転、さらに明治6年5月現在地(神戸市中央区下山手通5)に移転しました。明治7年(1874)新川運河の開墾が行われ、城跡の中心地はほとんど川底になってしまいました。



23 新川運河

兵庫区切戸町5(キャナルプロムナード)

- ▶ 新川運河と兵庫運河は日本で一番大きな運河となります。和田岬は船の難所とも言われ、大風の日には海岸線に多数の船が打ち上げられ破壊されました。明治になり和田岬を利用する船はますます増え、破壊される船も増え続けました。1870年の暴風雨で、難破船580隻、死者24人、行方不明者16人を出すに至り、この問題は無視できない問題となりました。毎年秋頃になると季節風が強く吹き、湾内に入るのに大変苦勞を強いられていました。前出の神田兵右衛門は『運河を開削すれば天候にかかわらず湾内に船舶が出入自由となり、その恩恵を受けて港は更に繁栄するであろう』と今出在家町から築島にかけての運河開削を計画しました。兵右衛門が代表者となり、兵庫県より弐萬五千円の補助と、事業賛成者より弐萬円の資金を調達し、『新川社』を設立し着工しました。しかし工事にあたっていた会社が倒産、また工事資金が底を付くなど、しばしば工事が止められましたが、兵右衛門は巨額の私財を投資して工事を完成させました。

